

看取り介護と家族の思い出

特別養護老人ホームカメラア桜ヶ丘・介護職

私の父は、82歳直前に車の中で倒れており、一命はとりとめたものの、急性心不全・腎不全の悪化で、自宅での生活が困難になり、特養へ入所することになりました。

入所後は、徐々に体力が衰えていきましたが、同時に優しくなりました。「いつも施設の方が優しくて、有難い有難い..。」と話しては、人気者の父。亡くなる数か月前から、『お父さん、すぐ忘れちゃうからメモ帳が欲しいな〜』と言い出し、一言日記をつけ始めました。また、亡くなる数週間前には、コロナ禍から数年ぶりに開催された敬老祭に参加し、ノンアルコールビールを満面の笑みで『うんめいなあ〜』と飲み干し、わたあめも食べ、ゲームも楽しみました。

数日後、一気に急変。家族全員で面会し、最後までしっかり会話をし、夕方『また明日ね。』と別れた夜、就寝中に眠りながら逝去していきました。

日記には【朝風呂、とても気持ち良く湯船につかる。介護士さん看護師さん優しくしてくれる。皆さんよく顔を出してくれる。本当に良くしてくれる。ありがたい事だ。買い物したいなァ〜ビスケットあめ又はチョコ〜 スルメも買えるといいな。】等と、感謝の思いが沢山書かれていて、父の部屋を片付けながら、家族で泣きながら大笑いしました。

15年間介護職として勤めてきて、看取りの家族側になり、自分が経験した思いを、今後も活かして働き続けていきたいと思えます！